

子宮がん検診（施設）

動 向

平成17年度における子宮がん施設検診受診者は、頸がん16,679名（前年度比582名減）、体がん2,535名（前年度比15名減）であった。

最近の研究によると、子宮頸部がんの多くは、性感染症であるヒトパピローマウイルス（HPV）が関与していると言われている。そのため、性活動が活発となる若い年齢層では、初交年齢の低下とあいまって罹患率が上昇傾向にある。

そのため、平成16年に厚生労働省は、老人保健事業に基づく子宮がん検診について検診対象年齢を20歳以上とし、受診間隔を2年に1度とする新しい指針を公表した。これを契機として、若い年齢層の検診の受診、特に初診の人の掘り起こしが望まれる。

結 果

子宮頸がん検診

2005年の子宮頸がん検診受診者数は16,679名、年齢階級別では、50歳代が多く、次いで、40歳代、30歳代の順である。初診の割合は26.9%、年齢階級別では、29歳以下が最も高く（85%）、次いで、30歳代（49%）、と若年に高く、加齢に伴って低下している。要精検率0.70%、要再検率0.85%、両者合わせた要再精検率は1.55%である。検出されたがんは11例、全例、子宮頸がん（扁平上皮がん9例、腺がん2例）である。本年度は、29歳以下では、受診者数は798名と昨年より384名も増加しましたが、がんは発見されませんでした。がん発見率は0.07%、初診に高く（0.18%）、年齢階級別では、30歳代が最も高く（0.14%）、次いで40歳代（0.07%）の順で、加齢に伴って低下しています。子宮頸がん11例中、早期がん（0期、Ⅰa期）が7例（65%）と高率に検出された事は、早期診断、早期治療に向けて、当該症例の方々の人生に多大な貢献をしたこととなり、当協会子宮がん施設検診の絶大な効果である。さらに頸部腺がん2例（18%）の検出は価値が高い。

検出された異形成は51例（軽度43例、中等度5例、高度2例、腺異形成1例）である。異形成発見率は0.31%、初診に高く（0.33%）、年齢階級別では、29

歳以下が著明に高く（1.00%）、次いで30歳代（0.48%）と若年に高く、加齢に伴って低下しています。

検出された頸がん、異形成両者の頸部細胞診クラス別検出率は、クラスⅡ再検17%、Ⅲa73%、Ⅲb100%、Ⅳ100%、Ⅴ100%と適正である。クラスⅡ再検から、頸がん0期1例、異形成13例（軽度11例、中等度2例）が誤陰性にせず検出されたことは大きな価値である。なお、2例の頸部腺がんが、共に無症状で初診の方から頸部細胞診クラスⅢb（55歳）、クラスⅣ（40歳）としてPick Upされ、みごとに検出されたことは、さらに大きな価値となる。

子宮体がん検診

子宮体がん検診受診者数は2,535名で、頸がん検診受診者数の15.2%である。吸引チューブが挿入できず、経膈超音波法による内膜厚測定に変更した症例（細胞採取不能例）95例を除いては、増測式吸引法による内膜細胞診を実施した。内膜細胞診の結果、要再検7例、要精検6例（疑陽性）の再精検が指示された。そのうち要精検から、体がん0期1例、内膜増殖症1例が検出された。細胞採取不十分による判定不能例は63例（0.25%）であった。

卵巣がん検診

一次検診で内診の結果異常を触知された方、または希望者に対し経膈超音波法、腫瘍マーカーを併用した卵巣クリニックを開設しています。受診者数271名から、卵巣がん0例、卵巣のう腫19例（7%）が発見されました。

関係の集計表は82頁に掲載